

ビブリア古書堂 事件
の裏で

ayaka_shinokawa

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ビブリア古書堂の事件手帖で五浦さんと葉子さんが事件を解決している裏側で、文香も動いていたのでは？と思い書いてみました。

目次

はじめり	1
夏目漱石　それから	4
小山清　落穂拾ひ・聖アンデルセン	10
ヴィノグラードフ　クジミン　論理学入	13
門	13
太宰治　晩年	18

はじまり

横須賀線。

この路線は東京から横浜・鎌倉を経由して横須賀、三浦半島を結ぶ首都圏の幹線だ。あたしの家は、この首都圏の大動脈の湘南側の入り口にあたる北鎌倉の駅前で古書店をやっている。

店の名前は「ビブリア古書堂」。世間ではシヨツピングセンター並みに大きな古書店が流行っているけど、古都鎌倉ではうちのような古本屋でもやっていけている。

姉によると、「人の手を渡って古い本には、中身だけではなく本そのものにも物語があるのよ」とのこと。

最近になって、あたしも姉の言っていることがなんとなくわかるようになってきた。大きな古書店ではわからない、「人の手によって生まれた物語」についてそのきつかけになった事件から話していきたいと思う。

ところで北鎌倉がどんな町か説明しておこうと思う。横浜と鎌倉の境界である「大船駅」と古都鎌倉の中心「鎌倉駅」それぞれから一駅。大船は駅ビル、シヨツピングセン

ター、大学に囲まれたにぎやかな街。鎌倉が鶴岡八幡宮をはじめとする鎌倉幕府の中心地だったことから世界中から観光客の来る観光の街であるのに対し、寺社や住宅に囲まれたとても閑静な街である。

駅はそんな閑静な住宅しかないのにとんでもなくホームが長い。また、改札口が鎌倉駅側にしかない上きっぷ売り場は1番線にしかない。

ホームが長いのは首都圏の大動脈ゆえ10両以上の電車が行きかっているからという理由はわかる。ただ、改札口がなんでそちら側にしかないのかはわからない。利用者としてはちよつと不便。

うちの店はそのような閑静な住宅地にあつて、店を開けていても一日数人のお客さんしか来ないことだつてある。だけど維持できているのはなぜか。それは昨今のインターネットと宅配便事情にある。

父が店主だったころは、看板にもある「古書買取・誠実査定」をお客さんが持ち込みこの店で行つていた。

今は店のウェブサイトにあるメールフォームから「買取依頼」「販売」まで何でもできてしまうのだ。実際現在の売り上げの6割以上はウェブサイト経由のお客さんだつたりする。

だから毎日毎日開ける必要は無いけど、学校から帰宅すると「営業中」のプレートを

かけ「店番」をするようになっていた。

父が亡くなり、姉があのような不幸な事故？事件？に巻き込まれてしまい家に帰って来られない状況になってしまい「家を守るのはあたしだ」という気になっていたからかもしれない。

あの日はウェブサイト経由で送られてくる姉宛のメールを「買取依頼」「古書搜索依頼」

「販売」「私用」に分類し、入院している姉のパソコンに転送しようとしているところだった。

夏目漱石 それから

引き戸が開く気配がしてゆっくり顔を上げる。父からは「お客さんが来たと思ってもあわてて顔を上げちゃならない。そういうときに限ってお客さんというものは逃げていくからね」

とのことだった。それが父のげんかつぎだと気づいたのはいつの日だったか。

「あ、買取ですか?」

と声をかけてお客の男性に顔を上げる。「うわ、いかつい」というのが第一印象。それを顔に出さずに聞いてみた。

このお兄さん顔はいかついけど、ちよつとシャイらしく、何か言いたそうにしているけど何かわからなかったので少し腰を上げてみた。

「……買い取りじゃなくて、ちよつと見てもらいたいだけなんですけど、いいですか。昔、うちの祖母がこの店で買った本のことです」

声のトーンは普通だったからあたしのことを値踏みしただけだとわかった。そりゃ、こんな小娘がカウンターに座っていたら、バイトの高校生と思われるだけだろうし。

話が続くと思って待ってみたが続かない。バイトの高校生に通じるのか迷ってし

まったのかも。

カウンタ―に紙袋が載せられる。アトレウイング（大船駅ビル）のものではなく横浜のデパートのだ。

中からは夏目漱石の全集の一部「第八巻それから」が出された。表紙の見返しに何か書いてある。

「このサインなんですけど」

なにに、「夏目漱石 田中嘉雄様へ」

「うわ、夏目漱石って書いてある！これ本物ですか？」

思わず聞いてしまった。買取の本を運ぶ手伝いはするけど、高価そうな本の中まで見たことが無かったのであたしにはわからない。

「それが分からなくて、ここへ来たんです」

あ、お兄さんが困惑している。質問に質問で返されたらそうなるか…。

「そうなんですか……んー、どうなんですかね？」

率直にそう答えてみた。単に高価な本を売りに来ただけのお客さんだったら、この態度でほしい帰ってくれる。

「……本物かどうか、見てもらえませんか」

あ、なにか因縁のある本を見てもらいたいお客さんのほうだったか……。あたしには姉

とは違って真贋が分かるわけではないし、本にこめられた思いというか、ストーリーは読み取れない。仕方なく、もうひとつの台詞を言ってみる。

「あ、今は無理です。店長がいらないんであたしはそういうのわかんないし」

これで帰らなかつたら仕方ない姉のところを持っていくか…と覚悟をする。

「店長さんは、いつ頃戻られるんですか」

「……入院しているんです」

と答えてから、大船中央病院まで行くルートを考え始める。

「ご病気ですか」

「いえ……あの、足を怪我したんですけど……本の持ちこみがあると、あたしが病院まで持っていて査定してもらわないといけないんですよ。ああもう、すつごく面倒くさい！」

思わず大きな声が出てしまったけど、病院に行くのは別に面倒ではない。大船駅までは一駅だし自転車でもいける距離だから…。

「まあ、大船中央病院だから、そんなに遠くはないんですけどね。ここから自転車で15分くらいだし」

だけど、行ったら帰ってくるのが大変なのだ。このお兄さんの漱石全集はそんなに重くなさそうだけど病院から持って帰らされる本の量が尋常じゃない。

姉の査定の速さもさることながら、顔見知りの看護師さんから困った顔で「文香ちゃん、申し訳ないけどお姉さんに病室は仕事場じゃないのよって言って」と部屋からはみ出そうな本を大量に持たされるのだ。

せっかく大船に出るんだったらイトーヨーカドーかライフによって食材を仕入れたいの……。

「……あ、あそこか」

とぼそりと言ったのが聞こえた。ということはこのお兄さんはこの近所、つまり大船か鎌倉に住んでいるってことだ。

「とにかくお預かりします。あたしも夏休み中は部活があつて、すぐ病院に行けるかどうか分からないから、何日かかかっちゃうけどいいですか?」

ウソではない。実際、今日だって部活をしに学校に行つてたし、店を閉めたら家事をしたり買い物に行かなきゃならないし、重い全集なら小分けにして運んでいくことになるし……。

「あの、ひよつとして大船中央病院によく行つたりします?」

「……うちの近所だけ」

アタリだ。

「だったらこの本を病院に持つていつてもらえませんか?あたしから連絡しておきます

から、その場で鑑定してもらえますよ！」

「え？」

とお兄さんが驚いている間にメールを打ってしまった。

お兄さんは大船の住民だったし帰り道で査定できちやうから一石二鳥つてももの。

「いや……そこまでしてもらわなくても……」

と言ってきたが言い終わるころには送信ボタンを押し、あたしはにっこり笑い、

「メールしときました！これでいつ行っても大丈夫ですよ」

と声をかけた。

その後、あのいかついお兄さんは五浦大輔さんといううちの店で働くことになった。

アルバイトの女子高生と思われていたあたしが、実は店主の妹であることを知った五浦さんはちよつと驚いていたようだ。

あたしもお客さんとして会って早々にアルバイトとして採用する姉にも驚いていたが……。

とりあえず、レジの打ち方と掃除用具の在り処を教えておけばいいか……と判断しそのようにした。アルバイトとして採用されたということは、あたしがいない午前中を中心に店番をお願いするつもりなのだろう。

ということはお買取についてはあたしがやったように「預かり」にすればいい。

「うちのお姉ちゃん、本のこと以外は全っ然世間知らずだからなー」

と知らず知らずのうちに繰り返していたようである。それもそのはず、

「こないだも母屋の方に空き巣が入ったんですよ！ なにもぬすまれなかったんだけど、このへんもなんか物騒になっちゃってー」

空き巣が入るとしたら店のほうだと思っただがなぜか母屋のほうに侵入してきたので、知り合いになった警察の刑事課盗犯係の刑事さんや古書店を管轄する生活安全課の刑事さんたちが不思議がっていた。ただ、女二人の生活だけに十分に注意するよう指導された。

そんなことを考えながら一緒に仕事をしていたが、履歴書にあるとおり実家が食堂をしていたということだけあって接客についてはあたしも認めるくらいになっている。そのためカウンターにあるパソコンでの仕事もお願いすることになっている。

また、買取をした本と査定が終わった本の持ち帰りは五浦さんにもらっている。

なんだか、病院に通う五浦さんはうれしそうだ。そして、姉から来るメールにも五浦さんのことが話題になるようになった。姉にもやっとな春が来たのだろうか…。

小山清 落穂拾ひ・聖アンデルセン

五浦さんと志田さんの出会いは万引き騒ぎからだった。

実は新刊書店、古書店に限らず大きな敵は万引きだつたりする。あ、万引き万引き言つてるけど実際は「泥棒」なので警察に捕まったら「窃盗罪」で逮捕・補導されるのであしからず。

実は万引きのせいで廃業してしまう書店は多い。皆さんの家の近くでも何十年も続く本屋さんが閉店してしまつたことがないだろうか。

だから、うちにとつても万引きは死活問題だ。

犯人の老婆には逃げられてしまつたと五浦さんから聞いたが、この辺の人だとしたら不景気つていうやつが古都鎌倉にも来ているつてことだろう。

志田さんはうちの常連で藤沢、鎌倉、横須賀、横浜南部あたりをまわる「せどり」の人だ。

「せどり」とは、大手のフランチャイズ古書店などではマニュアルに従つて廉価棚に入れられてしまう物を探し出してうちのような古書店に持ち込む人を指すらしい。諸説あるのであたしにはなんとも言えないけど…。

で、その志田さんの持ち込んだ事件も「泥棒」だった。

志田さんの持ち物から「落穂拾ひ・聖アンデルセン」が盗まれてしまったらしい。あたしが通っている高校の近くのお寺での話とのこと。話をしていて気づいたのは五浦さんが実はあたしの先輩だということだった。

「高校のとき鎌倉の寺社めぐりって言うのがあって、志田さんがトイレを借りた寺にも行ったことがあるんだよ」

とのこと。

あたしも春にやりましたよそれ。

志田さんから聴いた話によると、盗んだ人物はあたしと同じ高校生くらいの人物らしい。もしその子が小山清を売りに来たら、黙ってそいつから買い取ってほしい。とのこと。

志田さんの話をと本を持って病院にいった五浦さん、戻ってきてみたら犯人探すをする気になっていた。

次の日、店は休みだというのに来て志田さんの知り合いの「せどり」屋さんとうとう行ってしまった。

姉の病院に現れたのはあたしと同じ学校に通っている小菅奈緒さんだった。

学校では女の子があこがれてしまうくらいにかっこいい女の子だ。

その彼女が犯人で、やはり同じ高校に通う西野君に誕生日プレゼントを渡そうとして志田さんの自転車にぶつかりプレゼントを壊してしまつて、本の紐が必要になつて志田さんの本を盗んでしまつたとのことだつた。

後で話を聴いて本を盗つた小菅さんよりも、プレゼントを受け取らずに行つてしまつた西野君：いや西野への怒りを強く感じてしまつた。

西野許すまじ。

後日、藤沢に住む志田さんのもとに小菅さんが五浦さんと一緒に訪ね、返したことで一件落着いたらしい。

ヴィノグラードフ クジミン 論理学入門

九月。五浦さんはあつという間に優秀な古書店店員になってしまったので、あたしは普段通りに学校に通うことにした。

そのためほぼ一日店番、メールの分類、姉の入院している病院に査定する本の運搬などをお願いしている。

あたしはと言うと、学校から帰った後で店番の交代に入って五浦さんに査定の本を病院まで運んでもらっている。

ここでもうちの場合であるが古書店の仕事を記しておく。

古書店の仕事は新刊書店と違い販売することだけではなく、お客さんからの買取も業務に入る。

そのため店番の仕事は意外と書類仕事になる。販売をするときはPOSレジなんてものはないので何を何冊売ったのかノートにメモを残し、時間のあるときにエクセル形式の販売台帳に記入する。買取は複写式の買取伝票に記入することになる。姉がいるときはすぐに査定ができるので3枚複写の伝票。あたしや五浦さんのときは一旦「預かり」になるため、4枚式の伝票になる。4枚つづりのうち一枚がお客さんへの預り証に

なる。で、預かった本と伝票を持っていくことになる。

この4枚つづりの伝票を作るときには暗黙のルールがあつて、備考欄に鉛筆で補足情報を書くことになっている。普段はお客さんが査定を急いでいるのか、そんなに急いでいないか。また、値段がつかないときには処分して欲しいなどといった依頼も記入する。

他に、持ち込んできたお客さんの情報なども記入されていることもある。これは万が一持ち込まれた品物が盗品だったりしたときに、警察から協力依頼を受けたときの情報源になったりするからだ。

ちなみにボールペンで書いてしまうと、万が一複写式のところにペン先が行つてしまったときに書き込んだ情報がうつつてしまいかもしれないから。

そして、査定から帰つてきた本は伝票と一緒に保管され、電話または来店してきた時にお伝えしている。

査定額に納得いただいたときには、そのまま現金をお渡しして伝票のつづりの中にある領収書にサインかハンコをもらい明細書をお渡しする。

伝票はそのままファイリングすると古物台帳になるというすぐれもの。

で、今日は帰宅してみたら五浦さんが難しい顔をして座っていた。

あたしは制服のままカウンターに滑り込んで、店番交代の引継ぎにはいる。

「なんかあった？」

と聴くと、難しい顔のまま、

「ああ、それなんだけどね……」

と言つて買取伝票を指差す。

勢いのある字だけど住所や連絡先がなんとなくはみ出ているような坂口さんの伝票。

備考欄には50歳くらいの男性、紳士風、銀行員？アナウンサー？明日来店予定。と鉛筆書き。それにプラスして赤鉛筆で書かれた備考が。これは至急に姉と相談すべきことなどだ。「妻と名乗る人より電話あり、買取を中止して欲しいとのこと」と書かれている。

「これって、どういうことなんだろうね？」

と聴くと、

「わからん」

と言いつつ、どのような感じだったかをかいつまんで話してくれた。それだけでも、その奥さんと言う人が変わった人であるらしいことはよくわかった。

「おおかた、奥さんの本をだんなが売ってしまおうとしてるんじゃないか？」

「でも、紳士風の人なんですよ？紳士がそんなことするかな？」

と問いつ返すと

「まあ、そうだな。でも見かけじゃわからないじゃないか。んじや、今日分もつて病院行つてくる」

と言つて出かけてしまった。

そんなもんかな？なんて考えつつ今日の分の販売台帳の作成と、晩御飯の献立を考えつつ店番についた。

しばらくすると、

「五浦さんいらつしやる〜」

と言う大きな声とともに引き戸の開く音がし、

「あら〜バイトちゃん？五浦さんはいらつしやるかしら〜？」

と声をかけられた。

「あ、あの〜五浦は外回りに…」

と言いつ終らないうちに、

「そうなの〜。いつごろ帰つてくるのかしら、近く？近くならわたしから訪ねていっちゃおうかしら…ねえ、バイトちゃん？あなた、高校生？大変ねえ」

「は、はあ…」

この人があの赤鉛筆の注意書きの人だな…と思う。五浦さんはこれに圧倒されたんだらう。あたしですらたじろいでるんだから。

「実は、査定をできる店長が入院しているもんですから、五浦は病院に言ってしまったのですが」

と答えると、

「あら、そうなの？もしかして、うちの人の本も持っていてちやつたのかしら？」

「そうですね、一応買い取りでこられていますから報告を兼ねて……」

と言うとまた言い終らないうちに、

「病院ってどこかしら？鎌倉？大船？あ、そう大船ね？大船のどこ？大船中央病院ね？
ありがとう。バイト、がんばってね！」

とマシンガントークであたしから情報を取り出すときさつきと行ってしまった。

五浦さんが戻ってきたときに事の顛末を聞き、伝票には赤いマジックでバツテンを書いてファイイルに綴じた。

太宰治 晩年

2学期が始まってしばらく経つというのに、暑い日が続いている。今日は部活もあり、どうしても帰宅してすぐに交代する気がしなかつたので、母屋で洗顔をしている。すると窓の外が暗くなり夕立が降ってきた。

雨が降ってきたということは、店頭においてあるワゴンケースに雨よけのビニールシートをかぶせなくてはならない。ワゴンケースは大規模古書店で言うところの廉価品が入っている。査定がつかない本でも程度の良いものはこのケースに入れられる。

五浦さんのことだから、夕立の気配を察知して早々にシートをかぶせているとは思いますが、もしも店内で手の放せない作業をしているとたらしめ、母屋から店内に通じる引き戸を開ける。

ちようどカウンターに戻ってきたと思われる五浦さんと鉢合わせした。洗顔をするために筆頭にしたまま店に来たので五浦さんはちよつと引き気味。姉だったらお小言がくるかも…。

とりあえず空気を換えるべく話を振ってみる。

「あーあ。降っちゃったね」

そういうえば、ちよつと前までは五浦さんを警戒の目で見ていたのに、今じゃこんなだらしい格好をしているのはなんでだろ。まあ、姉に訪れた春じやなかった、姉が認めた人なのであたしとしては全然問題ないんだけど。まだ引き気味なので

「お客さん、来てる?」

と聞いてみた。

「いや、あまり……平日だし」

至極当然の返事が返ってきた。

「やっぱり不景気だねえ。つぶれちやうかなあ、うちも」

帳簿的には全然問題ないけどちよつと不安をおおるようなことを言ってみる。

すると、五浦さんがちよつと不安そうな顔になった。確かに姉が入院して2ヶ月、バイトに毛が生えたようなあたしが切り盛りしてきたんだ、それでもどうにかなってきたんだぞ。と言ってやりたいがしばらく五浦さんの不安を煽っておこう。

不安げな顔をしながら五浦さんがパラフィン紙に包まれた一冊の本を取りだし、棚に飾った。出された本を見てあたしは驚いた。

「あれ?その本!」

というのも、その本は祖父の代からあったすごい高い本だ。

「それ、昔からあったすごい高い本じゃなかった?あのほら、太宰の……」

「……晩年」

と助け舟が出される。

「この本、店に出しちゃうんだ。これだけはなにがあっても売らないってお姉ちゃん言つてたのに。やっぱりここんとこ売り上げがダメだから？」

売り上げについてはカマかけだ。売り上げなんて姉の査定とお客さんからアルバイトと勘違いされているあたしの体力でどうにかなるということとはとつくにわかっている。

「……最近、この本を買いたがつてる客つていた？」

「いないよ、全然」

と首を横に振った。

「お姉ちゃんと同じようなこと言うね。しょっちゅうお姉ちゃんにも訊かれるんだ……この本を買いたいって人は来てないか、もし来たらずくに連絡しなさいって。ね、なんか大事なこと？」

「いや……別に」

五浦さんは顔には出さないがちよつとした仕草でうそをついていることが分かる。あたしと同類だ。あたしがうそをつくときの動揺には全然気づいていないようだけど。

何がしかの事件がこの本には関わっている。たぶん姉が入院したのもこの本が原因

なのかもしれない。

あたしはガラスケースを覗きこみ『晩年』を凝視する。なんか違和感。

「あのさ、これってお姉ちゃんが病室の金庫に入れてたやつだよな？」

「うん、まあ……」

「こんなに綺麗な本だったっけ……？」

そうだ、こんなに綺麗な本ではなかったはずだ。もうちよつと古びたというか汚れていたというか……。

「前に見た時は、もうちよつと汚れてたような気がするけどなあ……角の方とか」

ニセモノか……やっぱりなにかある。

もう少し情報を得ようと五浦さんに話しかけようとしたとき、外から「どーん！」という雷鳴が聞こえた。

「おおう。凄かったね、今の。きつと近くに落ちたよ！」

あたしの関心はそちらに移ってしまった。

あたしが母屋に戻った後で小菅さんが来たらしい。あたしとしてはボーイツシュでかつこいクラスメイトとしてしか認識していなかったんだけど、志田さんや五浦さんと姉と関わったことであたしとも関わりができていた。

実は、小菅さんの事件のあと、あたしは使える情報網を使って西野のことを調べ上げ

た。で、いろんな子に話しているうちに学校中に広まっていた。でも、あたしが広めたことは分らないはず。

小菅さんの後に、あのにぎやかな奥さんがご夫婦で来店したらしい。その際に店の外にいた男が看板にガソリンをまいて火をつけようとしていたとのこと。

そんなことがあつてから数時間後、うちの前に消防車と警察が来る羽目になった。駅にいた人と駅員さんがうちから火の手が上がっていると通報したらしい。

幸い五浦さんが消しとめ、犯人も志田さんと笠井さんの協力によって捕まえられた。なんと犯人は西野だった。

北鎌倉駅前の山ノ内交番のお巡りさんと五浦さんに取り押さえられた西野は、そのまま大船警察署にパトカーで連行されていった。

そして大船消防署の火災調査官と五浦さんの話しによれば、坂口さんご夫婦が帰られた後火をつけようとした男がいたことを姉に伝えていたところ、店の前から火の手と黒煙が見えたので五浦さんが消しとめ、たまたま近くにいた志田さんと笠井さんが西野を捕まえる形になり、五浦さんと通報を受けて飛んできた交番のお巡りさんが捕まえたのだとか。

ただ、消防の調査官からはうちもちよつと注意を受けた。坂口さんご夫婦が来た時点でガソリンがまかれたことから消防にその旨報告して、まかれたガソリンを適切に処理する必要があつたらしい。特にうちのような燃えやすい物件はそうなんだとか。

警察と消防については五浦さんが対応してくれたし、

「妹ちゃんは出てこなくていいよ」

と志田さんと笠井さんが店番を買って出てくれた。

五浦さんが事情聴取から戻って笠井さんが開口一番

「……結局、ただの逆恨みってことかな」

とのことだった。

西野が五浦さんや刑事さんに言った話によると、「学校で他の生徒たちから無視されるようになったのは、誰かが自分のプライバシーを調べ上げ、陰で言いふらしたからだ。怪しいのはもちろん小菅奈緒だが、他にも「犯人」がいるに違いない。小菅を尾行するうちにこの店にたどり着いた…」というこららしい。

で、小菅さんと五浦さんが話しているのを見て、「店を全焼させるつもりはなかったが、痛い目に遭わせてやろう」と考えたらしい。

さらに、同じように小菅さんの家にも火をつける予定だったらしい。

それって、現住建造物放火ってやつで死刑までありうるんだよ…西野。

ただ、これについてはあたしも反省だ。あたしの情報網というか仲間うちも似たような調査能力とスピーカー機能があるってことだ。今回は看板を燃やしたただけですんだが、店に燃え移っていたらと考えると恐ろしい。

しばらく表は男の人に任せてしまおう。

しばらくして、笠井さんがうちに侵入した空き巣だったりしたことが分かって、これまたぞつとする話を聞かされしばらくへこんだのは内緒だ。

そして、姉と五浦さんの間にも亀裂が生じたらしい。笠井さんに面会に行ったはずの五浦さんが、

「……、辞めたから……」

と未払いの給料を取りに来た。

一ヶ月だけの店員、姉としつかりとしたかかわりを持つことのできた男性なのでちよつと残念に感じた。

しばらくたって、あたしは近況を聞くために電話してみた。就職活動がうまくいってたらいいし、うまくいっていなかったとしたらまたうちに戻ってもらうきっかけとして……。

「……店、どうなってる？」

しよっぱなから聞かれてしまった。やはりちよつと気にしていたらしい。

「うん。新しい店員さんが入るまで、ちよつと閉店してるの。あ、別に五浦さんが気にしなくてもいいからね。もともと、お姉ちゃんがいないのに店を開けてるのが無理だったんだし」

実際にはあたし一人でもやっていけたんだけど、今回の件があつて一人でやっていくのはちよつとまずいと姉も考えて閉めることにした。

さすがに放火事件のあつた後だし。

「……」

五浦さんはきつと閉めるきつかけになつたのは自分なのではと自問しているんじゃないかと思つている。

だから聞きにくいけど聞いてみよう。

「それよりもさ、ちよつと訊きたいことがあるんだけど」

「……」

「五浦さん、お姉ちゃんとなんかあつたんだよね？」

答えにくい質問をしてしまった…とそのときは思ったけど、でもストレートに聞くほうがいいだろう。

「うん、まあ……ちよつと」

「ちよつとつてひよつとして……ちよつとあの巨乳に触っちゃったとか?」

低い声で言われてしまったのでちよつとひねりを入れてみた。

「そんなわけねえだろ!」

ちよつとからかったことで気分がほぐれたんだらう。普段の五浦さんの調子に戻った。

「でも、ほんと大きいよね、お姉ちゃん。形もなかなかですよ」

とさらにからかつてみる。

「……電話切るぞ」

確かに就職活動で携帯の連絡先を教えているんだらうから、つながらないと大変なことになりかねない。くだらないことばかり言つてられないな。

「ごめん、ちよつと待って!お姉ちゃん、様子が変なの」

「え?」

「本をね、読まなくなつたんだ」

そう。店を閉める一因にはこれもあるのだ。今までだったら査定といつつ、たくさんの本を病院に持ち込んで看護師さんから文句を言われていたあの姉がだ。

「五浦さんが辞めてから、ずーつとぼんやりして……せつかくもうすぐ退院なのに、元気がないんだ。だから心配になつちやつて。ちよつとでいいから、見舞いに行つてくれ

ないかな？」

確約の返事は取れなかったが一応こちらからの現況報告をした。

しばらくして五浦さんの就職活動は失敗に終わり、再びうちの店に通ってくれることになった。